

納戸・鍵の間

納戸と鍵の間は、足軽（歩兵）屋敷のプライベート空間です。これらの部屋の出現は、江戸時代（1603—1867）における足軽の生活の変化を雄弁に伝えています。

納戸：

納戸はもともと日用品を収納するのに利用されました。これは寝室としても使用され、家族は布団を並べてこの部屋と一緒に睡眠をとりました。しかし、家族の規模が拡大するにつれて、日用品数も増加しました。利用可能なスペースが限界に達すると、しばしば追加の部屋をつくることになりました。

鍵の間：

清水家でも家族の規模が拡大し、それに併せて「鍵の間」は納戸の遠端に設けられました。その名称は、家の設計において、日本語でキー（鍵）を意味する「鍵」に似ている形に部屋が設けられたことに由来すると考えられています。通常の日本建築様式とは異なりますが、このような部屋は、当時の構造上の必要性や空間的限界から生じた特有のものだと考えられています。

この追加された狭いスペースは、主に学習や作業用に利用されました。ここで足軽の家族は、読書や細かい内職に勤しんでいました。子供たちは、ここで内職を手伝い、勉強し、または遊んだのだと思います。夜になると、子供たちはこの部屋で眠りについたことでしょう。